

建設関連産業の 未来のための 技術評論

藤盛 紀明

NPO 国際建設技術情報研究所 理事長
秋田大学客員教授

鉄骨を愛する仲間たち

鋼構造出版を創設した田中正幸顧問を偲ぶと共に、同時代に鉄骨分野で活躍した仲間について記した。田中氏が創設した鉄骨関係専門誌『鋼構造ジャーナル』『鉄構技術』の功績、専門誌の意義や田中氏の鉄骨業発展への貢献についても言及した。1968年、日本鋼構造協会の企画で実施された故加藤勉・東京大学名誉教授をトップとする米国鉄骨調査団は米国鋼構造協会（AISC）を訪問した。AISCの各種規準は鉄骨ファブリケーター出身の委員が中心で作成し、設計者・大学の研究者はそれを支援・アドバイスする仕組みであった。この思想を実践するために、日本建築学会のJASS 6委員会に「鉄骨工事試験検査小委員会」を設置し、メンバーには鉄骨ファブリケーターの専門家から多く参加頂き、幹事の一人にも就任頂いた。「ものづくり」では発注者・設計者・ゼネコン・協力業者は対等な立場で話し合うことを実践した経緯を記した。この委員会で作成した『鉄骨精度測定指針』、現在のAW検定も、その制定の基本思想は鉄骨を製作する側の立場を擁護することだったことも記した。この思想は田中正幸氏にも共感を頂き、一緒に行動した経緯を記載した。1968年のAISC訪問で一緒だった鉄骨仲間が現在も活躍しているのは松崎博彦氏である。鉄骨分野に対する松崎氏の長期的活動と貢献についても記した。

鋼構造出版を創設した田中正幸顧問を偲ぶ会に出席した。筆者の現役時代、最も長く従事した専門分野は「建築鉄骨」であった。その時の仲間たちの多くは現役を去り、この世から去る仲間も出てきた。久米設計の照沼弘氏、鉄骨技術の伝道師の古藤凱生氏、鋼構造・エネルギー論の天才秋山宏先生、そして鉄骨業界を紙面で支えた田中正幸氏である。田中正幸氏が鋼構造出版を設立した1980年頃、筆者は所属する企業の技術研究所の鉄骨グループのグループ長として活動していた。溶接部の超音波探傷試験（UT）の研究が終了し、日本非破壊検査協会（JSNDI）規格・JIS規格・日本建築学会（AIJ・学会）規準作成に尽力していた。

UT検査技術者の教育と資格認定もJSNDIや全国鐵構工業連合会（全構連、現全国鐵構工業協会）で推進していた。UT関連が一段落した後、学会で『鉄骨精度測定指針』の作成に取り組んだ。この指針作成の真意は、鉄骨検査が設計事務所やゼネコン側からの一方的な要求になり勝ちなので、検査担当者個人の恣意的な要求や判断を避けるためのルールを作ろうと言うことであった。

そのために学会のJASS 6委員会に「鉄骨工事試験検査小委員会」を設置した。メンバーには鉄骨ファブリケーターの専門家から多く参加頂き、幹事の一人にも就任頂いた。「ものづくり」では発注者・設計者・ゼネコン・協力

業者は対等な立場で話し合い、QCDS（品質・価格・工期・安全、当時“E環境”はなかった）を確保すると言うのが大事と言う考えであった。

筆者の考えは田中正幸氏の鋼構造出版設立の思いと一致し、互いにすぐ意気投合した。しかし「鉄骨工事試験検査小委員会」の会議の議論では、当初は筆者の思いとは別に、設計者・ゼネコン側委員は発注者目線となり、鉄骨ファブリケーター側委員に一方的に意見を押し付け勝ちであった。そのため学会外でも親交を深め業務上の上下関係感を払拭するために「サンプリング会」と言う非公式組織を設立した。この会の主旨に田中氏は大いに賛同され、積極的に参加された（図1）。しかし当時、我々に賛同され、一緒に活動した方の多くが引退され、先に記したように亡くなる人も出てきている。照沼氏、古藤氏、田中氏亡き後も、鉄骨ファブリケーターの地位向上活動が継続されるよう願って本論を記すこととした。

本評論のタイトルを「鉄骨を愛する仲間たち」としたが、「鉄骨」の愛し方は各自と考える。田中氏の偲ぶ会で頂いた『鉄構業と共に生きて』には氏の理想として「鉄骨加工業者の存在と仕事の内容を社会に広く伝え、業界の社会的地位の向上に資する媒体を目指したい」と記されている。亡くなられた前日に「自身」で書かれたメモには「建築鋼材と共に78年」「田中正幸の人

生」とある。鋼構造出版としては鉄骨業界を支えることが使命としていたが、ご自身としては建築鉄骨に関わるすべてへの深い愛情があったと思われる。

それは田中氏が常に我々に見せていた柔和な笑顔が示している。「鉄骨を愛する仲間たち」には鋼材・鋼構造・鉄骨製作そのものを愛する人もいた。このような人は鉄骨製作に携わる人や構造設計者や研究者に多かった。亡くなられた古藤凱生氏はその筆頭だった。氏は鉄骨の熱変形などの扱いにくいものにこそ愛着を持っていたように思う。筆者も鋼材を切断する時の臭いや火花、大地震時の鋼材の粘り強さには感嘆した。筆者の場合はそれよりも鉄骨ファブリケーターで頑張っている技術者、溶接士への仲間意識の方が大で、その原点は1968年に日本鋼構造協会の企画で故加藤勉・東京大学名誉教授をトップとする米国鉄骨調査団に参加した経験である。米国鋼構造協会（AISC）訪問時に、AISCの各種規準は鉄骨ファブリケーター出身の委員が中心で作成し、設計者・大学の研究者はそれを支援・アドバイスする仕組みであった。建築鉄骨は製作する人が「我々はこのような規準で製作する。それで良ければ発注・購入してほしい」と姿勢である。日本では古代からお上が表示する歴史があるが、ものを造る人を大事にする姿勢の大切さを感じた旅であった。

田中氏が最初に発刊されたのは1980

年の『鋼構造ジャーナル』である。筆者は今も購入し、愛読している。これ一冊で鉄骨ファブリケーター業界、そこで働く人々、関連学協会、政府や地方自治体の動き・状況がよく分かり、かつての鉄骨仲間の動向を知ることができる。1988年には『鉄構技術』を発刊された。鋼構造作品・設計技術・製作技術など鋼構造のすべて分野のバイブルであり、啓蒙誌である。

最近のヒットはBIMをいち早く紹介し、鋼構造分野のみならず建築界全体に普及させたことである。日本鋼構造協会の協会誌『JSSC』と並んで鋼構造発展に大きく寄与している。筆者も本誌に「検査に強くなる話」(1998～1999年)、「技術からみた建設業の歴史」(2001～2002年)、そして現在は「建設関連産業のための技術評論」を連載させて頂いている。おかげで鉄骨関連の公的仕事からは離れた現在でも、愛する鉄骨の仲間に語りかけることができている。田中氏の出版社は2014年にはWEBニュース『道路構造物ジャーナルNET』の配信を始めた。

筆者が考える業界誌の役割は、足で稼ぎ、関係者との適切な間合いで得た事実に基づく詳細・正確な業界情報発信。業界を愛し支える目線が必要だが、業界への厳しい姿勢で業界の内外をつなぐご意見番的存在。専門分野の経営・技術・品質などのきめ細かい情報を

発信して、経営者の方針を支え啓発する役割が期待され、田中氏はそれを実践した。『鉄構業と共に生きて』では、田中氏が創設した3媒体の編集内容は『経営』と『品質』と集約している。鉄骨系2誌の愛読者である筆者も納得するものである。田中氏は「日本専門新聞協会」で功労賞、功績賞を受賞、建設業界全体への貢献も大きいことが示された。鉄骨業界にとって田中氏の喪失は痛手だが、後継者や編集者・記者に期待するところである。

筆者の鉄骨仲間でも今でも現役でこの分野で活躍しているのは『鋼構造ジャーナル』を見ている限りでは松崎博彦氏(図2)である。氏は1968年の鋼構造協会の米国視察団の仲間で、帰国後に「鉄骨工事試験検査小委員会」「鉄骨工事運営委員会」で一緒に仕事をさせて頂いた。『JASS6鉄骨工事』改定、『鉄骨精度測定指針』『鉄骨工事技術指針』作成などでも一緒だった。全構連の建築鉄骨検査技術者、鉄骨製作管理技術者の制定でも一緒に働いたが、松崎氏は実質リーダー役だった。設計事務所の現場溶接技術者技量確認試験の無理難題に対応するために、現在のAW検定の元となる現場溶接工の技量認定創設でも、設計事務所の有力者や関連協会とのネゴでも汗を流しあった。

AW検定がなぜ創設されたか、本来の主旨を知っているのは、今では松崎氏のみではなかろうか。エンドタブ協会やAWA認証機構などは筆者が鉄骨分野

から離れてからの仕事だが、鉄骨にかかる愛情・エネルギーは尽きることはないようである。サンプリング会の創設は筆者だが、運営は松崎氏が中心で、ゴルフ大会には田中正幸氏も参加し、成績は『鋼構造ジャーナル』に掲載された。ゴルフの成績は松崎氏が常にトップクラスで筆者は最下位近くをうろついていた。古藤凱生氏も私と同レベルでお互いに慰めあったことは懐かしい思い出である。松崎氏の鉄骨に対する愛情については直接聞いたことがないが、松崎氏＝鉄骨と言うほどのほれ込みようではなかろうか。田中氏は日本専門紙協会から表彰されているが、松崎氏のこの永続的な鉄骨に対する愛に報いる表彰があってほしいと願っている。

筆者現役時代の仲間の鉄骨を愛する人たちは現役を離れ、亡くなられる人も出てきている。現在の学協会における鉄骨・鋼構造関係者の活躍状態はどうであろうか。建築学会の「鉄骨精度測定小委員会」の最近の委員には設計事務所、ゼネコン、鉄骨ファブリケーターの人が参画していて、我々が築いた思想は保持されており嬉しく思っている。「建築鉄骨検査技術者」「鉄骨製作管理技術者」などの技術者認定についても鉄骨関連諸団体の連携により、「鉄骨技術者教育センター」が設立され、鉄骨団体のトップが副理事長に就任されている。実際に製作する人を重視すると言う、松崎氏や筆者の抱いていた思想は今も息づいていることを大変心強く思っている。



図1 サンプリング会ゴルフ(1994年) 前列右端: 田中正幸氏



図2 JSSC米国調査団(1968年)に参加して(左写真中央: 松崎氏 右: 筆者)